

2011 ; 137(1) : 16P]

- 5) Kawamura M Jr., Ruskin DN¹⁾, Masino SA¹⁾(¹Trinity Coll.). The basic mechanism of a ketogenic diet: A purinergic autocrine regulation of CA3 pyramidal neurons. Neuroscience 2010 (SfN's 40th Annual Meeting). San Diego, Nov.
- 6) 初山俊彦. ラットドーパミン性ニューロン細胞体からのドーパミン遊離と活動電位との同時記録. 第88回日本生理学会大会/第116回日本解剖学会総会・全国学術集合同大会. 横浜(誌上開催), 3月. [J Physiol Sci 2011; 61 (Suppl. 1) : S167]
- 7) 初山俊彦. ラット中脳単一ドーパミン性ニューロン細胞体からのドーパミン遊離検出. 第84回日本薬理学会年会. 横浜(誌上開催), 3月. [J Pharmacol Sci 2011; 115 (Suppl. 1) : 116]
- 8) 西 晴久. ヒト副腎皮質由来 H295R 細胞のコルチコイド産生における細胞内 Ca²⁺ 上昇持続の重要性. 第84回日本薬理学会年会. 横浜(誌上開催), 3月. [J Pharmacol Sci 2011; 115 (Suppl. 1) : 223]
- 9) 川村将仁, Ruskin DN¹⁾, Masino SA¹⁾(¹Trinity Coll.). てんかん療法 ketogenic diet におけるアデノシン A₁ 受容体の関与. 第84回日本薬理学会年会. 横浜(誌上開催), 3月.

IV. 著 書

- 1) 初山俊彦訳. 第II編: 神経細胞と筋細胞の生理学 7. 神経伝達物質と神経修飾物質. 岡田泰伸監訳. ギャノン生理学. 原書23版. 東京: 丸善, 2011. p.153-75.

病 理 学 講 座

教 授: 羽野 寛	人体病理学: 特に肺・肝の臓器病理学
教 授: 福永 眞治 (病院病理部出向中)	人体病理学: 診断病理, 軟部腫瘍, 産婦人科領域
教 授: 酒田 昭彦 (病院病理部出向中)	人体病理学: 特に肝とリンパ網内系の病理
准教授: 鈴木 正章	人体病理学: 特に泌尿生殖器・乳癌の病理
准教授: 池上 雅博 (病院病理部出向中)	人体病理学: 特に消化管の病理
准教授: 千葉 諭	人体病理学: 特に肝・骨髄・循環・膝・胎生形態学の病理
准教授: 鷹橋 浩幸	人体病理学: 特に泌尿生殖器, 分子病理学, 診断病理学
講 師: 野村 浩一 (病院病理部出向中)	人体病理学: 特に婦人科の病理
講 師: 金網友木子 (病院病理部出向中)	人体病理学: 特に腎組織病理
講 師: 原田 徹 (病院病理部出向中)	人体病理学: 特に肺腫瘍, 臓器基本構築

教育・研究概要

I. 肝臓に関する研究

1. アルコール性脂肪肝と非アルコール性の脂肪肝・脂肪性肝炎を対象に, 初期および後期段階の脂質酸化ストレス状況について検討した。その結果, 初期酸化ストレスは特に脂肪滴周囲で微細顆粒状に, 後期酸化ストレスは肝細胞内と貧食マクロファージ内で微細から粗大顆粒状に発現していた。いずれの病型とも酸化ストレス下にあったが, 脂肪肝から脂肪性肝炎への進展には後期脂質酸化ストレスが関与している可能性が示唆された。

2. 閉塞性黄疸における増生細胆管の起源に関する免疫組織学的研究を続行した。今までにCK7, hepatocyte の免疫染色の結果から, 増生細胆管は肝細胞に由来し, 肝細胞の direct transdifferentiation によると結論した。今回は肝細胞のCK7および肝細胞抗原の共発現に関して, 蛍光2重染色にて再確認した。また, 胆汁 drainage により胆汁鬱帯を軽減した症例では, CK7 発現の肝細胞は著しく減少し, 細胆管の増生は停止し, 増生細胆管は一方で減少, 一方で残存するものは既存の小葉間胆管上

皮に類似してくる。胆汁導出システムの再構築、すなわち自己組織化の動向と考えられたが、立体再構成によるさらなる追究が必要であり、今後の課題である。

3. 非アルコール性脂肪性肝炎 (NASH) の線維化過程について研究を続行した。初期変化では、小葉中心性に線維化が始まり、次の過程で隣接する小葉間で、同様の線維化が繋がり、既存の末梢門脈域を囲むように線維化が進展していく。その後、さらに線維化の進展した NASH 症例において、組織連続切片を作製し、立体再構成により線維化の進展を追求した。現時点では初期の末梢門脈域を囲む線維化が線維化進展例で顕著となることを確認している。表現を変えれば、門脈域の変化は少なく温存される傾向すなわち小葉構造は保たれたままに、中心静脈を含む線維化が帯状をなして、隣接する同様変化と連続していくという変化である。この stage になり動脈系にも変化が現れ、門脈域に由来する動脈が、線維化域や静脈周囲に顕著に発達していることが、新事実として特筆される。

4. これまでの解析結果から、肝細胞癌の発生と転移過程に関連する候補領域の一つが 8q22-23.2 であることを明らかにした。今回は主に当該候補領域から候補遺伝子の選出を行った。しかし、DLC1, MTUS1 など代表的な既知の遺伝子を含む 10 数個の候補遺伝子を解析したところ、いずれも有意な遺伝子変異が認められなかった。そのため、遺伝子機能に関連する mRNA 発現の定量解析とそのタンパク質の発現変動を検討することが今後の課題となっている。

II. 腎臓に関する研究

1. Oxford 国際分類と日本分類を構成する病理パラメータに関する追試研究：IgA 腎症 Oxford 研究の手法を用いて我が国のコホートにおいて後方視的に追試した。その結果、日本のコホートは、Oxford 交際分類には適応できず、その原因は追跡機関、対象年齢、初期の eGFR と蛋白尿の制限の違いによる。国際組織分類が標準となるためには日本のコホートにも適応できる分類が望まれた。

2. Oxford 国際分類と日本分類の病理診断者での再現性に関する研究：15 施設 90 症例の IgA 腎症を用いて、4 人の観察者が Oxford 基準にそってスコア化し、級内相関係数 (intraclass correlation coefficient: ICC) を用いて多者間の再現性を評価した。組織学的重症度分類 (活動性と慢性) と Oxford 分類についての再現性は良好であった。

3. 嚢胞状腎癌では、腫瘍全体が嚢胞状であるものから、一部が嚢胞状であるものまで、スペクトラムがある。嚢胞状の部が 50% 以上である場合、転移例はなく、予後は極めて良好である。

4. 腎組織の経年変化：腎に著変がない 45 剖検例 (0~96 歳) の正常右腎組織標本で計測を行い、次の結果を得た。① 1 cm² 当り糸球体密度は胎児で 4,000 個を超える例もあったが減少し、20 歳以降 20~10 となる。② 糸球体平均直径は、新生児 60μm、乳児 100μm、20 歳約 130μm、60~70 歳で 160μm 位と漸増。③ 皮質に占める糸球体面積の割合は新生児・乳児で 0.6% に達する例もあるが、10 歳位までに 0.2~0.3% に減少。④ 皮質の 1 mm² 当り尿細管数は新生児期で 2,000 位で以後漸減、10 歳以降 1,000 前後。⑤ 糸球体毛細血管係蹄数は 1 mm 当り生後 60~70 個で、その後 70 個前後に漸増。

III. 消化管に関する研究

内視鏡的食道癌切除術の適応を拡大させ、かつ内視鏡的切除後の無駄な食道切除を削減させる目的で食道表在癌におけるリンパ節転移の危険因子について検索した。外科的に切除された食道表在癌 203 病変を用いて、リンパ節転移群と非転移群とに分け、病理組織学的な各種危険因子について多変量解析を行った。本検索においては、特に脈管侵襲を特殊染色により正確に同定したことが、その特色である。リンパ管については D2-40、静脈については CD31, CD34, EVG 染色を用いた。多変量解析の結果、リンパ節転移と最も関係の深かった因子は、特殊染色を用いて評価した脈管侵襲であり、その陰性的中率は、94.6% であった。

IV. 呼吸器に関する研究

中心性肺気腫の morphogenesis を知るために、Masson 染色、弾性線維染色を施した厚切り標本を用いて観察を行った。気腫形成につながる肺胞壁の破壊像を段階的に捉えることができた。初期段階では、肺胞壁の大小の丸い欠損 (fenestra) で最初は独立して見られるがやがて融合して大きな欠損部位を形成する。やがてこの変化は近傍の同様変化を示す肺胞が一緒になって、領域的に太い弾性線維を含む梁状の構造だけが残ることになる。一方細気管支に付着して肺胞壁にも同様の変化が起こり、細気管支は徐々に肺胞による支えを失うに至る。このように弾性線維や膠原線維 (張腺系) によって支えられた肺の構造はその崩壊にとって相俟って、気流による力学的影響を受け、嚢胞化していくものと考えら

れた。

V. 泌尿生殖器に関する研究

病理学病期がpT1に相当する膀胱癌には微小浸潤から粘膜下層に広範に浸潤するものまで、非常に幅が広い。pT1症例を浸潤程度により、a, b, cに亜分類し、無病・無増悪・疾患特異的生存期間の解析を行った。pT1c（癌巣の50%以上が浸潤癌のもの）の無増悪生存期間はpT1a（顕微鏡的浸潤癌）よりも有意に短かった。このことより、pT1亜分類は膀胱癌の予後推定に有用であろう、との結論に至った。

VI. 代謝・内分泌に関する研究

Fabry病の剖検報告を行った。Gb3抗体を用いて、光顕上の沈着部位と免疫陽性部位との異同について検討し、抗体の有効性について考察をした結果、従来糖脂質の沈着部位とされていた心筋・糸球体上皮・尿管上皮細胞への有用性は得られたが、内分泌臓器（下垂体・副腎・膵臓）にも陽性所見がみられ、この確定には電顕検索が必要となったが本症例は死後時間が長く、パラフィン戻しの電顕検索は不十分であり、今後の検討課題となった。

VII. 神経に関する研究

肺に転移した中枢神経発症の良性髄膜腫（Grade I）を経験した。過去の良性髄膜腫の転移報告例を参照し、今回の症例と比較検討した。今回の症例は臨床経過、腫瘍形態より肺原発性髄膜腫でなく、転移性髄膜腫であると結論付けた。

VIII. 乳腺に関する研究

良悪境界病変を約191例集め、電算化した。病理医により、良性（過形成）～悪性（非浸潤性乳管癌）まで診断にばらつきがある。アクチン、p63、CD10の免疫染色で検討した。管内の増生部位にまで陽性所見がある（二相性が明瞭である）場合、乳頭腫であり、良性である。ところが、管の周囲のみの陽性所見がある（筋上皮がある）場合、良悪の判定にばらつきが出る。充実性の増生を過形成と考えると良性過形成になり、二相性がない腫瘍性増生と考えると、非浸潤性乳管癌となる。

〔点検・評価〕

スタッフおよび基本的業務：業務は教育、研究、診断業務である。講座は主として教育、病院病理部は主として病理診断業務を担っているが、この基本

的役割分担は本年も変わらない。平成22年4月時点でのスタッフの体制は、病理学講座は、教授1人、准教授1人、講師2人、助教2人、本院病理部は准教授1人、講師2人、助教3人のスタッフでスタートした。分院病理部の陣容は青戸病院病院病理部は准教授1人、第三病院病理部は准教授1人、柏病院病理部は講師1人、助教1人である。途中本院病院病理部の助手一人が退職している。

昨年度からの病理医不足が解決されないままの状況だが、診断業務に関しては青戸、第三病院の病院病理部においては、引き続き外部から臨時に病理医の応援を得て、業務を遂行した。

教育：基本的に昨年度と変わらない。座講については、3年生コース臨床基礎医学Ⅰ、4年生コース臨床医学を中心に病理学関連科目の講義が行われた。前者では主に病因病態、炎症、代謝、ヒトの時間生物学、腫瘍などのユニットにおいて病理学関連の講義を受け持った。臨床医学Ⅰは臓器別疾患となるが、多くのユニットに参加して、疾患の病理学的側面について講義し、病理に課せられた責務を果たした。なお4年生の講義は本年度より70分に短縮され、それに相応しい教え方が要求された。それに伴う措置として教科書を指定した。演習、実習関係では大きなものとして、3年ユニット病理学総論実習、4年ユニット病理学各論実習がある。総論実習については週1回、4月～7月、各論実習については週1回、5月にスタートし11月に終了した。実習形式に関しては従来の形式を踏襲、本年も学生をグループ分けして指導する方式を採った。3年前から導入したスケッチの評価方法を本年度も実施したが、教員の負担は大きい。その他、3年症候学演習、研究室配属、選択実習にも参加した。選択実習は昨年と同様に3フェーズまで学生を取ることにし、技術者の協力を得て薄切、染色、電顕などの実習も取り入れた。概ね好評であった。CPCについては、研修医を対象とするCPCに3年生から6年生まで参加し、順調に行なわれたが、学生にとっては理解が難しいという意見が多い。対策が必要であろう。

病理診断業務および病理解剖：病院病理部では、1年間約16,500件の手術・生検検体、約17,200件の細胞診が処理され、診断された。各分院においても同様に多くの検体の処理と診断が行われた。協力と努力により大過なく業務を進めてきたことは評価されてよい。病理解剖の数は100体を下回って大分経つが、やはり回復の傾向は見られない。臨床には剖検から学ぶという実証的態度が求められるし、我々も臨床の納得いく剖検報告を、少なくとも3カ

月以内に出せるように努力する必要がある。

研究：病理学講座・病院病理部は、本学の伝統である人体病理を中心に、診断病理、臓器病理学などの研究活動を行なってきた。「本年度も診断業務や教育などの日常業務に時間がとられるという厳しい環境であったが、それぞれ研究上の解決すべき問題を明確にして地道に取り組むより方法がない」と昨年度の点検・評価では書いたが、今年度もこれと大差のない状況である。研究は、自分の体と頭を使って行う一つの創造的行為であるから、一定の時間を確保されなければ成し遂げられないのは言うまでもない。ここしばらく続いている研究の低迷から脱出するには、講座・病院病理部間の出来るだけ思い切ったローテーション体制を実現させるなどの対策が必要であろう。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Yoshimura N, Goda K, Tajiri H, Ikegami M, Nakayoshi T, Kaise M. Endoscopic features of nonampullary duodenal tumors with narrow-band imaging. *Hepatogastroenterology* 2010; 57(99-100): 462-7.
- 2) Fukuda T, Akiyama N, Ikegami M, Takahashi H, Sasaki A (Niigata Univ), Oka H (Saitama Med Univ), Komori T (Kitasato Univ), Tanaka Y¹⁾, Nakazato Y¹⁾ (¹Tokyo Metropolitan Inst), Akimoto J (Gunma Univ), Tanaka M²⁾, Okada Y²⁾ (²Tokyo Med Univ), Saito S. Expression of hydroxyindole-O-methyltransferase enzyme in the human central nervous system and in pineal parenchymal cell tumors. *J Neuropathol Exp Neurol* 2010; 69(5): 498-510.
- 3) Matsumoto N, Umezawa T, Sasaki T (Tokyo Med Univ), Nakajima K, Kanetsuna Y, Sasaki H. Clinical and prognostic value of the presence of irregular giant nuclear cells in pT1 ovarian clear cell carcinoma. *Pathol Oncol Res* 2011; 17(3): 605-11. Epub 2011 Jan 28.
- 4) Kobayashi H, Shimada Y, Ikegami M, Kawai T, Sakurai K, Urashima T, Ijima M, Fujiwara M, Kaneshiro E, Ohashi T, Eto Y, Ishigaki K¹⁾, Osawa M¹⁾ (¹Tokyo Women's Med Univ), Kyosen SO (Erros Inatos), Ida H. Prognostic factors for the late onset Pompe disease with enzyme replacement therapy: From our experience of 4 cases including an autopsy case. *Mol Genet Metab* 2010; 100(1): 14-9.
- 5) Yamane T, Uchiyama K, Ishii T, Nakano M, Kanetsuna Y, Okusa T, Tajiri H. Isolated granulomatous gastritis showing discoloration of lesions after *Helicobacter pylori* eradication. *Dig Endosc* 2010; 22(2): 140-3.
- 6) Miki K, Kiba T¹⁾, Sasaki H, Kido M, Aoki M, Takahashi H, Miyakoda K¹⁾, Dokiya T (Saitama Med Univ), Yamanaka H (Kurosawa Hosp), Fukushima M¹⁾ (¹Translational Research Informatics Center), Egawa S. Transperineal prostate brachytherapy, using I-125 seed with or without adjuvant androgen deprivation, in patients with intermediate-risk prostate cancer: study protocol for a phase III, multi-center, randomized, controlled trial. *BMC Cancer* 2010; 10: 572.
- 7) Terui K¹⁾, Nakatani Y¹⁾, Kambe M¹⁾, Fukunaga M, Hishiki T¹⁾, Saito T¹⁾, Sato Y¹⁾, Takenouchi A¹⁾, Saito E¹⁾, Ono S¹⁾, Yoshida H¹⁾ (¹Chiba Univ). Kaposiform hemangioendothelioma of the choledochus. *J Pediatr Surg* 2010; 45(9): 1887-9.
- 8) Kawachi K¹⁾, Nawata H¹⁾, Yamagata Y¹⁾, Yae-gashi H (Tohoku Univ), Fukunaga M, Moriya T (Kawasaki Med Univ), Furuya T¹⁾, Sugino N¹⁾, Sasaki K¹⁾ (¹Yamaguchi Univ). Chromosomal imbalances detected by comparative genomic hybridization provide evidence that HMB-45-negative uterine angiomylipomas belong to the PEComa family. *Histopathology* 2010; 56(7): 974-7.
- 9) Tervaert TW, Mooyaart AL, Amann K, Cohen AH, Cook HT, Drachenberg CB, Ferrario F, Fogo AB, Haas M, Heer ED, Joh K, Noel LH, Radhakrishnan J, Seshan SV, Bajema JA. Pathologic classification of diabetic nephropathy. *J Am Soc Nephrol* 2010; 21(4): 556-63.
- 10) Tsuboi N, Ichinose M, Kawamura T, Joh K, Utsunomiya Y, Hosoya T. Rapidly progressive cryoglobulinemic glomerulonephritis. *Clin Exp Nephrol* 2010; 14(5): 492-5.
- 11) Berden AE, Ferrario F, Hagen EC, Jayne DR, Jennette JC, Joh K, Neumann I, Noel L, Pusey CD, Waldherr R, Bruijn JA, Bajema IM. Histopathologic classification of ANCA-associated glomerulonephritis. *J Am Soc Nephrol* 2010; 21(10): 1628-36.
- 12) Yoshida K, Kurosaka D, Joh K, Matsushima S, Takahashi E, Hirai K, Noda K, Ukichi T, Furuya K, Yanagimachi M, Kingetsu I, Fukuda K, Yamada A. Fasciitis as a common lesion of dermatomyositis demonstrated early after disease onset by en bloc biopsy combined with magnetic resonance imaging. *Arthritis Rheum* 2010; 62(12): 3751-9.
- 13) Fukunaga M, Suzuki K (St. Luke's Int Hosp), Hiruta N (Toho Univ). Cotyledonoid dissecting leiomyo-

- ma of the uterus : a report of four cases. *APMIS* 2010; 118(4) : 331-3.
- 14) Takeyama H, Takahashi H, Tabei I, Fukuchi O, Nogi H, Kinoshita S, Uchida K, Morikawa T. Malignant neoplasm in the axilla of a male : suspected primary carcinoma of an accessory mammary gland. *Breast Cancer* 2010; 17(2) : 151-4.
- 15) Wakui S¹⁾, Muto T (Tokyo Lab), Motohashi M¹⁾, Kobayashi Y¹⁾, Suzuki Y¹⁾ (¹Azabu Univ), Takahashi H, Hano H. Testicular spermiation failure in rats exposed prenatally to 3,3',4,4',5-pentachlorobiphenyl. *J Toxicol Sci* 2010; 35(5) : 757-65.
- 16) 相原弘之, 斎藤彰一, 二上敏樹, 田尻久雄, 池上雅博. 【大腸 SM 癌の取り扱い】 当科における大腸 SM 癌の内視鏡診断・治療方針. *消化器内科* 2011; 52(2) : 168-73.
- 17) 中尾 裕, 池上雅博, 斎藤彰一, 梅澤 敬. 【病理医から内視鏡医への注文】 上部・下部消化管における検体の処理の仕方 病理医からみて. *消内視鏡* 2010; 22(7) : 1073-9.
- 18) 加藤久美子, 神尾麻紀子, 野木裕子, 川瀬和美, 鳥海弥寿雄, 武山 浩, 池上雅博, 内田 賢. 肉芽腫性乳腺炎の 3 例 ステロイド治療の検討. *乳癌の臨* 2010; 25(5) : 593-8.
- 19) 木村 愛, 寺脇博之, 中尾正嗣, 高根紘希, 濱口明彦, 小倉 誠, 金網友木子, 細谷龍男. 腹膜炎・カテーテル感染症 セラチア菌腹膜炎罹患後に出現した腹水のコントロール目的に腹膜透析を再開した 1 例. *腎と透析* 2010; 69 (別冊 腹膜透析 2010) : 366-9.
- 20) 村瀬樹太郎, 入江健夫, 山尾あゆみ, 萩野展広, 成尾孝一郎, 三枝裕和, 大脇和彦, 波多野篤, 福永真治, 福田国彦. 咀嚼筋間隙に発生した滑膜肉腫の 1 例. *日画像医誌* 2010; 28(1) : 35-43.
- 21) 梅沢 敬, 土屋幸子, 芦川智美, 福村絢奈, 佐藤 俊, 池上雅博. ホルマリン希釈混合装置を用いた衛生工学的対策. *検と技* 2010; 38(7) : 578-80.
- 2011; 29(1) : 34-8.
- 5) 福永真治. 【病理形態学キーワード】 女性生殖器中間型栄養膜細胞. *病理と臨* 2010; 28 (臨増) : 268-9.
- 6) 城 謙輔, 黒須 明 (獨協大). 【免疫疾患と腎障害】 Dysproteinemia と腎障害. *腎と透析* 2011; 40(1) : 83-8.
- 7) 福永真治. 【病理形態学キーワード】 骨・軟部 血管内皮腫. *病理と臨* 2010; 28 (臨増) : 366-7.
- 8) 福永真治. 【絨毛と胎盤をめぐる新知見】 絨毛性疾患の病態・病因論 絨毛性疾患の病理診断. *臨婦産* 2011; 65(3) : 225-9.
- 9) 鷹橋浩幸. 泌尿器 針生検にて良性腺管と誤認されやすい前立腺癌. *病理と臨* 2010; 28(10) : 1090-1.
- 10) 池上雅博. 【早期大腸癌 2010】 早期大腸癌の病理 PG, NPG 分類からみた早期大腸癌の発育様式. *胃と腸* 2010; 45(5) : 715-9.

Ⅲ. 学会発表

- 1) 金網友木子, 中野雅貴, 山口 裕 (山口病理組織研究所). 腎血管障害の病理と腎機能 動脈硬化の病態と腎障害. 第 99 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2010; 99(1) : 377]
- 2) 鷹橋浩幸, 山本順啓, 古里征国, 羽野 寛. 前立腺導管-腺房型腺癌の臨床病理学的解析. 第 99 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2010; 99(1) : 204]
- 3) 鈴木麻子, 磯西成治, 矢野真吾, 池上雅博, 羽野 寛, 二階堂孝 (佼成病院). 外陰部腫瘍を初発症状とした成人 myeloid sarcoma の一例. 第 99 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2010; 99(1) : 364]
- 4) 鹿 智恵, 羽野 寛, 千葉 諭, 藤ヶ崎純子, 小峯多雅, 林 勇介, 竹内行浩, 池上雅博. 原発性肺癌の発生における 8 番染色体短腕領域の染色体変化と各組織型との関連. 第 99 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2010; 99(1) : 291]
- 5) Lu T, Hano T. Allelic imbalance at 8p and 13q in lung cancer : difference between small cell lung cancer and non-small cell lung cancer. 69th Annual Meeting of the Japanese Cancer Association. Osaka, Sept. [日癌会総会記 2010; 69 回 : 350]
- 6) 千葉 諭, 稲垣卓也, 小峯多雅, 鹿 智恵, 遠藤泰彦, 池上雅博, 鈴木正章, 羽野 寛. 解剖例による正常肝の光顕的組織計測 第 2 報. 第 99 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2010; 99(1) : 319]
- 7) 鹿 智恵, 鷹橋浩幸, 池上雅博, 羽野 寛. 肝細胞癌 8p21-23.2 マイクロサテライト分析の最新情報. 第 99 回日本病理学会総会. 東京, 4 月. [日病理会誌 2010; 99(1) : 320]

Ⅱ. 総 説

- 1) Fukunaga M, Asanuma K, Irie T. Peculiar chondroblastoma involving multiple tarsal bones. *Skeletal Radiol* 2010; 39(7) : 709-14.
- 2) 池上雅博, 中尾 裕, 斎藤彰一. 【大腸癌の病理診断をみつめる】 PG, NPG 分類からみた大腸癌の発育, 進展. *大腸癌 Frontier* 2011; 4(1) : 54-8.
- 3) 鷹橋浩幸, 山本順啓. 【病理形態学キーワード】 男性生殖器 クリスタロイド. *病理と臨* 2010; 28 (臨増) : 232-3.
- 4) 福永真治. 婦人科病理組織診断 鑑別の要点と診断困難症例への挑戦 胞状奇胎の見方. *日婦腫瘍会誌*

- 8) 福永真治. (ワークショップ4: 婦人科病理組織診断: 鑑別の要点と診断困難症例への挑戦) 胞状奇胎の見方. 第48回日本婦人科腫瘍学会学術講演会. つくば, 7月. [日婦腫瘍会誌 2010; 28(3): 269]
- 9) 福永真治. Histologic diagnosis of hydatidiform mole. 第99回日本病理学会総会. 東京, 4月. [日病理会誌 2010; 99(1): 386]
- 10) Fukunaga M. Hepatoid adenocarcinoma with serous element of the tube. The 4th AMR International Symposium in Anatomic Pathology. Istanbul, June.
- 11) Fukunaga M. Small cell carcinoma of the ovary, hypercalcemic type. The 4th AMR International Symposium in Anatomic Pathology. Istanbul, June.
- 12) Fukunaga M. Perivascular epithelioid cell tumor of the uterus. The 4th AMR International Symposium in Anatomic Pathology. Istanbul, June.
- 13) Fukunaga M. Well-differentiated mesothelioma of the rete testis. The 18th Japan-Thailand Cytology Workshop. Phuket, Jan.
- 14) Fukunaga M. Pitfalls in Pap smear in uterine cervix. AOGIN (Asia-Oceania Research Organization in Genital Infections and Neoplasia) Interim Meeting. Bali, Mar.
- 15) 原田 徹, 池上雅博, 鈴木正章, 福田隆浩, 下村哲也, 鈴木麻子, 小池裕人, 野村浩一, 羽野 寛, 河上牧夫 (聖隷佐倉市民病院). 長期生存したFabry病の一部検例. 第99回日本病理学会総会. 東京, 4月. [日病理会誌 2010; 99(1): 268]
- 16) 鈴木正章, 羽野 寛, 小池裕人, 鈴木麻子, 池上雅博, 金月 勇, 平澤良征, 清野洋一. 悪性腫瘍を合併したGoham病の一例. 第127回成医会総会. 東京, 10月. [慈恵医大誌 2010; 125(6): 215-6]
- 17) 中野雅貴, 金網友木子, 山口 裕 (山口病理組織研究所). Collagen type 3 glomerulopathyの一例. 第99回日本病理学会総会. 東京, 4月. [日病理会誌 2010; 99(1): 347]
- 18) 鷹橋浩幸. 画像診断のために必要な前立腺病理. 第46回日本医学放射線学会秋季臨床大会. 横浜, 9月. [日医放射線学会秋季臨床抄集 2010; 46回: S467]
- 19) 酒田昭彦, 島田 修, 黒田 徹, 田中知行. 腓体尾部原発の孤立性線維性腫瘍の手術例. 第99回日本病理学会総会. 東京, 4月. [日病理会誌 2010; 99(1): 328]
- 20) Takahashi H, Yamamoto T, Mizukami S, Furusato M, Egawa S, Fujime S (Juntendo Univ), Hano H. Necessity and usefulness of pathological T1 subclassification in the management of bladder urothelial carcinoma. 100th Annual Meeting of the United States and Canadian Academy of Pathology. San Antonio, Feb. [Mod Pathol 2011; 24 (Suppl. 1): 227A]

IV. 著 書

- 1) 長谷川申 (藤田保健衛生大), 池上雅博, 鶴田 修 (久留米大). コラム 鋸歯状構造を有する大腸病変の診断. 五十嵐良典 (東邦大), 河合 隆 (東医大), 北川雄光 (慶応大), 田中信治 (広島大) 編. コンセンサス消化器内視鏡 2010-2011. 東京: 日本メディカルセンター, 2010. p.125-31.
- 2) 金網友木子. 移植腎病変 移植後リンパ増殖疾患. 日本腎臓学会・腎病理診断標準化委員会, 日本腎病理協会編. 腎生検病理アトラス: 「腎生検病理診断標準化への指針」病理改訂版. 東京: 東京医学社, 2010. p.269-73.
- 3) 福永真治. VI: 胎盤 73. Placental site trophoblastic tumor (PSTT), 74. Early complete hydatidiform mole (早期の全胞状奇胎). 清水道生 (埼玉医大) 編. 婦人科病理診断トレーニング: What is your diagnosis? 東京: 医学書院, 2010. p.301-8.
- 4) 城 謙輔. 第II章: 人体各器官の正常構造と疾患 8. 腎・尿路系 B. 症例 糸球体疾患 (症例 219~224). 鈴木利光 (福島県立医大), 山川光則 (山形大), 吉野 正 (岡山大) 監修. カラーダイナミック病理学: 365 症例からのアプローチ. 東京: 西村書店, 2010. p.632-47.
- 5) 鈴木正章. 第II章: 人体各器官の正常構造と疾患 14. 耳鼻咽喉頭・口腔系 B. 症例 耳疾患, 鼻腔・副鼻腔疾患 (症例 310~314). 鈴木利光 (福島県立医大), 山川光徳 (山形大), 吉野 正 (岡山大) 監修. カラーダイナミック病理学: 365 症例からのアプローチ. 東京: 西村書店, 2010. p.894-903.

V. その他

- 1) 櫻村弘隆¹⁾, 櫻村好夫¹⁾ (¹⁾ 櫻村胃腸科外科), 池上雅博, 山口裕一郎 (静岡がんセンター), 梶本徹也 (富士市立中央病院), 八尾隆史 (順天堂大). 早期胃癌研究会症例 併存する炎症性ポリープの消長を観察しえた膀胱炎による大腸狭窄の1例. 胃と腸 2011; 46(3): 327-35.
- 2) 金網友木子, 木村 愛, 中尾正嗣, 小倉 誠, 多田紀夫. 急速な腎機能低下と消化管穿孔を発症したコレステロール塞栓症の1剖検例. 第5回動脈硬化症例検討会. 東京, 7月. [Prog Med 2011; 31(1): 206-13]
- 3) 鹿 智恵. 肝細胞がんの発生・進展に関連する責任遺伝子の同定. 平成21年度科学研究費補助金実績報告書 (研究実績報告書). 2010.
- 4) 金網友木子. 移植腎の病理 第11回移植腎の感染症 その他のウイルスと細菌感染. Astellas Medical Net. 2010.

- 5) 鷹橋浩幸. 病理における効果的なプレゼンテーション. 病理と臨 2010; 28(4): 446-7.

ウイルス学講座

教授：近藤 一博 ウイルス学, 分子生物学

教育・研究概要

I. 教育概要

1. 医学科講義・実習

3年時学生の「ウイルスと感染」の講義を16コマ担当し、ウイルス学の基礎とウイルスと関係する疾患の基礎的な理解のための講義を行なった。実習は、5コマの実習を行なった。講義・実習ともに、ウイルス感染症の病態、診断、治療、予防など、将来、医師としてウイルス感染症に対処できるための基礎を学習することを重視した。さらに、最近の本学入学者の研究者指向に合わせるべく、医学者として、原因不明の疾患の研究、新しい感染症の出現、ウイルスを利用した医療に対応できる基礎力をつけられる様に配慮した。「感染免疫テュートリアル」も担当し、テュートリアル形式を通して学生の感染症学への理解を深めることに努めた。

2. 看護学科講義

ウイルス学の講義を6コマ担当した。

3. 看護学校講義

慈恵看護専門学校においてウイルス学の講義を16コマ担当した。

II. 研究概要

ヘルペスウイルスの研究を通してウイルスの生体に与える影響を明らかにすることで、疾患の成立機構や生命機能を理解することを研究目的としている。また、ウイルスの治療用ツールとしての応用も研究課題としている。具体的には、ヒトヘルペスウイルス(HHV-6)が関係すると考えられる、気分障害などの精神疾患の研究、HHV-6やHHV-7を利用したウイルスベクターの開発、ヘルペスウイルスの再活性化研究を通しての疲労の測定法やメカニズムの研究など、臨床応用を見据えた基礎研究を中心にこなっている。また、来るべきメディカルイノベーションの時代に対応できることも視野に入れ、発明を作り出せる研究体制の構築や知的財産の獲得にも力を入れている。具体的な研究テーマは以下のとおりである。

1. ヒトヘルペスウイルス6(HHV-6)感染と、うつ病との関係に関する研究

HHV-6は、慢性疲労症候群(CFS)との関係が疑われているウイルスである。CFSは強い疲労を